先史時代の虻田

入江地区の高台には国指定史跡の入江貝塚・高砂貝塚があり、縄文時代からこの地区に集落があったことを物語っています。この貝塚には貝が少なく、海獣や魚の骨が多く出土します。また、埋葬されたと見られる人骨も多く発見されています。

アブタ・コタン

虻田が文献の上で初めて登場するのは、「オコタラヘ」という名で、「アブタ」という名では、1722年の「松前東西郷並に蝦夷地所付け」が最初です。アブタとはアイヌ語で「釣り針を作る川」を意味する「アプタペツ」を略したものとされています。

松前藩の支配下に入ったアブタ・コタンにはアブタ場所が置かれていました。場所とは松前藩が家臣にアイヌとの交易権を与えた和行地のことです。

アブタ場所には他にはレブンゲ、ベンベ、フレナイの各コタンがあり、アブタ・コタンはこれらからなる地域の中心集落であったようです。

有珠・虻田牧場と有珠山の文政噴火

蝦夷奉行の戸川安論が蝦夷産馬の性質の良さを気に入りこれを殖やすための直轄牧場の開設を幕府に進言し、有珠・虻田牧場が虻田に建設され、この牧場の牧士頭となる村田卯五郎が虻田に定住（1800年）をします。これが和人定住の最初といわれています。

1822年（文政5年）の有珠山の噴火は火砕流をともなう大規模なもので、麓のアブタ・コタンを焼き尽くしました。村田卯五郎や場所請負人和田屋茂兵衛らの和人、そして多くのアイヌの人達が犠牲になりました。現在の入江地区にあったアブタ・コタンは「トコタン（廃村）」となり、虻田市街地の方へ移住を余儀なくされました。

明治の虻田

明治に入ると蝦夷地は開拓史の管轄下に置かれ北海道と名を変えましたが、当初のうちは一部の地域を旧藩や寺社などに分領支配させていました。

虻田は1869年より約1年間、庄内藩（改称して大泉藩）の支配下に入り、1871年には伊達以南を支配していた旧亘理藩（仙台藩の支藩）藩主・伊達藤五郎邦成の領地となりました。翌年ようやく開拓使室蘭出張所の管轄下に置かれ、西紋鼈（もんべつ）戸長役場に属しました。虻田に虻田郡各村戸長役場がおかれ、西紋鼈戸長役場より分離独立したのは1880年のことです。

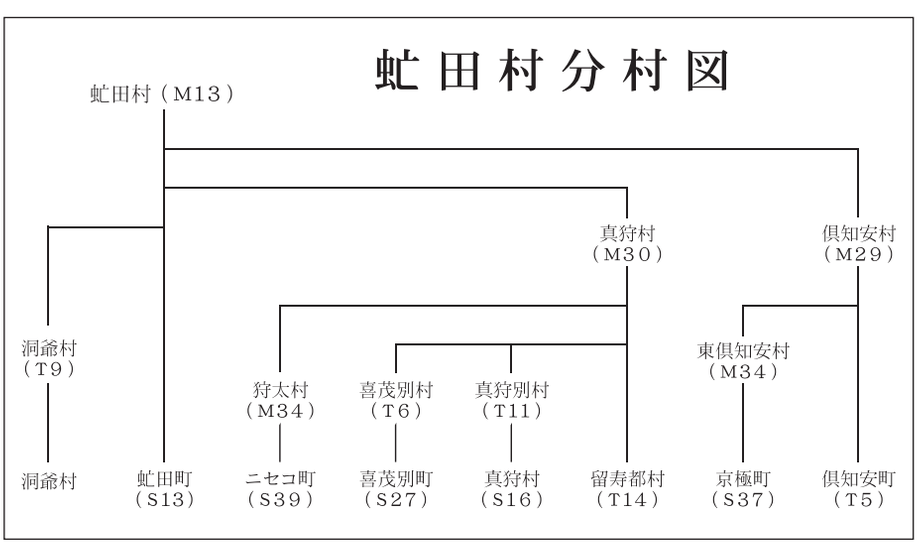
当時の虻田村はほぼ現在の虻田郡全体にあたる広い地域でありましたが、明治30年前後から羊蹄山麓で開拓により集落ができるにつれ、これらを徐々に分村していくことになります。この頃の虻田市街は内陸部に入植する開拓者達の中継地として、あるいは開拓に必要な物資の集散地として急速な発展をしました。

洞爺湖温泉

洞爺湖温泉は比較的歴史の浅い温泉で、1917年6月に発見されました。壮瞥町の三松正夫、杉山春巳、安西岩吉の一行が虻田鉱山見学の帰途、西丸山近くの湖岸から湯気がでているのを発見し、掘削してみたところ熱水が噴き出しました。1910年の有珠山噴火の影響でここへの湧出が始まったとみられます。三松らは翌月に道庁から利用許可を受け、秋には竜湖館という温泉宿を始めており、これが洞爺湖の温泉旅館第一号ということになります。

1928年に国鉄長輪線（現在の室蘭本線）が全通、翌年虻田駅（現在の洞爺駅）と洞爺湖畔との間に洞爺湖電気鉄道が開通（1941年に廃止）すると、洞爺湖温泉は多くの宿の並ぶ温泉街となりました。世の中は1929年から世界恐慌に突入しましたが、温泉街の発展はこれを乗り切る原動力となりました。

1944年の有珠山の活動で出現した昭和新山は、第二次世界大戦後に新たな観光地となりました。また、1949年には、一帯が支笏洞爺国立公園に指定され「洞爺」の知名度が上がったこともあり、洞爺湖温泉はさらに多くの観光客を集めるようになります。虻田は戦後の不況期をまたも温泉に救われることとなりました。

1982年からは、連夜花火を打ち上げるロングラン花火大会が始まり、温泉の新たな名物となりました。有珠山の至近にあり、1977年、2000年の噴火では物理的な損害のみならず、観光客の減少による営業的な損害も非常に大きかったが、洞爺湖温泉の人気は衰えず、虻田町の経済を牽引し続けています。

虻田村分村図